

# ニュージーランドの ESOL 教育における英語発達段階指標<sup>1</sup>

## — 指標を持たない日本の英語教育との国際比較 —

村上美保子（星城大学） / 高島英幸（東京外国語大学）

今井典子（高知大学） / 東野裕子（西宮市立高木小学校）

桐生直幸（鎌倉女子大学短期大学部） / 奥村耕一（横浜市立旭中学校）

牛山真弓（茅野市立東部中学校） / 石毛佐和子（旭市立三川小学校）

柿本早紀（足立区教育委員会） / 八代晃（千葉県立君津高等学校）

人見徹（東京外国語大学大学院）

ニュージーランドは、425 万人の国民のうち、ヨーロッパからの移民が 74.2%を占め、英語を母語とする人々が大半を構成する国であるが、近年、先住民族であるマオリ族(13.6%) はもとより、中国、韓国などアジアからの移民(6.1%)やサモア、フィジーなどの太平洋の島々出身の移民(5.9%)が増え、英語以外の言語を母語とする居住者が増加している<sup>2</sup>。そのため、ESOL 教育(English for Speakers of Other Languages: 英語以外の言語を母語とする人のための英語教育) が、各学校種において導入されている。本稿では、ESOL 教育において利用されている、英語学習者の発達段階指標(*The English Language Learning Progressions*) を精査し、同種の指標を持たない日本の学習指導要領に則る英語教育への示唆を考察する。

ニュージーランドは、ヨーロッパ言語共通参照枠(Common European Framework of Reference for Languages : CEFR)<sup>3</sup>に拠らない独自の言語発達能力指標を持つところが、隣国のオーストラリアの場合と類似しており重要である。どのような指標を設けて英語教育を行っているのかを知ることは、将来、日本人学習者のための言語能力基準を構築する上で、他国の基準を参考

としながら、当該国の言語事情や文化的な背景を鑑みた独立した指標を作成する上での基礎研究となるものである。

## 1. 言語（英語）学習環境

ニュージーランドの ESOL 教育では、母語を基盤として英語を学ばせるスタンス (English as an Additional Language, 以下 EAL) を取る。アメリカ、オーストラリアのように英語が国民の第 1 言語（母語）である場合や、シンガポール、フィリピン、香港などのように公用語が英語である国や地域で英語を第 2 言語として学習する ESL (English as a Second Language) 環境や、日本、中国、韓国、フィンランドのように、英語を外国語という教科として学習する EFL (English as a Foreign Language) 環境に対し、EAL では、ESL 環境にはあるが、学習者の母語の発達を重視する。行政が、英語をはじめとする授業において、抽出指導などの様々な支援を行う必要性を指導資料などで教職員に周知し、施策が行われる。

学齢期の移民などの児童・生徒に EAL として英語教育を提供する国にはイギリスがある（高島 他, 2001）。イギリスでは、EAL 学習者向けの特別クラスは設けず、通常授業(mainstream)で他の児童・生徒と共にあらゆる教科を学習する。小学校や就学前教育などでは、学習者の母語話者が教室に支援者として入ったり、抽出して個別指導をしたり、クラスを英語の母語話者と EAL 学習者に 2 分割して読み聞かせや活動などをしたりする。*National Curriculum* と呼ばれる国家の教育指針には、EAL 学習者の英語の発達状況の評価に関するセクションがあり、すべての教科の教師に対して EAL 学習者の英語能力について理解した上で授業計画を立てることを求め、*National Curriculum* の英語科における到達段階と EAL 学習者の英語の発達段階を同じ尺度で評価することとしている。

英語を母語とするニュージーランドにおいてもイギリスと同様に、ESOL 教育では英語は EAL として教えられている。しかし、イギリスのように児童・生徒を通常授業に初めから入れるのではなく、EAL 学習者向けの特別授業が行われている。次項では、ニュージーランドにおける ESOL 教育について概観する。

## 2. ESOL（英語以外の言語を母語とする人のための英語）教育

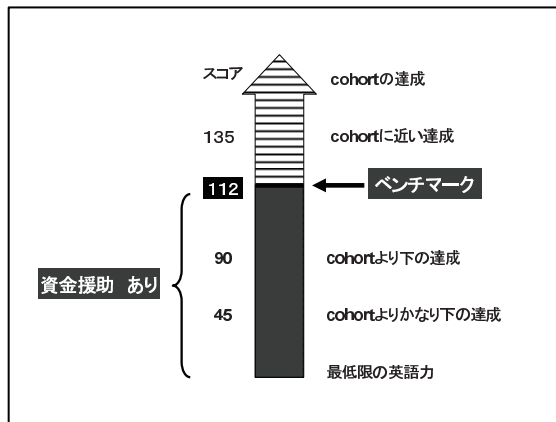
ニュージーランドは 1940 年代半ばまで、原則として英語を話さない移民は受け入れなかった。1950 年代になると労働力の不足を補うため、主としてサモア、トンガ、フィジーなどの太平洋の島々からの移民を受け入れ始めた。1987 年に移民法が改正され、難民を含むすべての移民が認められるようになると、人数だけでなく移民の母国の多様性が増した。2007 年の統計では、ニュージーランドには 160 の国や地域から 165 の民族が移民してきており、英語以外に使われている言語は 110 に上り、1,200 の学校の計 29,000 人の児童・生徒が ESOL 教育を必要としている(The Ministry of Education, 2008a)。中でも、アジアからの移民は近年激増しており、2016 年までには人口の 16%を占めるようになると予測されている(Kitchen, 2009)。このような状況を受け、ニュージーランド政府は ESOL 教育に関する教育資金援助を学校に配分し、また、ESOL の児童・生徒の英語力の発達に関する指針となる *The English Language Learning Progressions* (以下、*ELLP*)と呼ばれる教育資料を作成し、教師が活用できるようにしている。

### 2.1 ESOL 教育の対象と教育資金援助

ESOL 教育のための教育資金援助の受給対象となる児童・生徒は、①難民、②移民、③親が英語以外の言語を母語とするニュージーランド生まれの子ど

も<sup>4</sup>のいずれかに属する。彼らは非英語母語話者であるため、ニュージーランドで公教育を受ける際には、英語を理解・運用できる能力を身につけることが最優先事項となる。しかし英語運用能力には個人差があり、通常の授業だけでは個々に応じた適切な言語指導を行うことは難しい。そのため、彼らの英語運用能力を十分にかつ効率よく伸ばさせるためには、通常授業とは別に英語に特化した授業を少人数で行う必要がある。ESOL 教育の対象児童・生徒は、入学時に英語力の評価<sup>5</sup>を受け、「同年代の多くの児童・生徒が身につけていると考えられるレベル」(cohort レベル：112 点)に達するまで複数学期を通して継続的に指導を受けることになる(図 1 参照)。

図 1 ESOL 教育資金援助のベンチマーク



(The Ministry of Education (2004) に基づき作成)

これらの教育的支援を行うための援助資金は、原則としては政府から支給される。ESOL 教育資金援助の受給対象の児童・生徒が入学すると、各学校はその人数と各児童・生徒の英語のレベルを含めた情報を記載した一覧表を教育省に提出する。金額は対象者の学年や能力、受給期間によって異なるが、

1人につき年間 NZ\$600 から NZ\$1800 である。この資金は、支援が必要な児童・生徒をサポートするための **teacher aids** と呼ばれる人材の雇用や、ESOL 用の教材開発、カリキュラム作成などの諸費用に充てられる。ESOL の授業を受ける期間は、ニュージーランド以外で生まれた児童・生徒の場合（前述の①と②）は最長 12 学期間（3 年間）、ニュージーランドで生まれた児童・生徒の場合（前述の③）は最低 2 学期間（6 ヶ月間）となっている。児童・生徒によっては、この期間中に十分な能力に到達しないこともあるが、そのまま通常授業に戻らざるを得ないという現状がある。

一方、政府からの ESOL 資金の支給対象とならない留学生や親の仕事の都合で一定期間現地の学校に通う外国人の児童・生徒は、**international fee-paying student** と呼ばれ、ESOL 教育の授業料を個人で負担する。従ってこのような児童・生徒が在籍する学校は、政府からの ESOL 教育資金援助以外にも独自の資金を得ることとなり、ESOL 教育のための資金額は学校によって異なってくる。

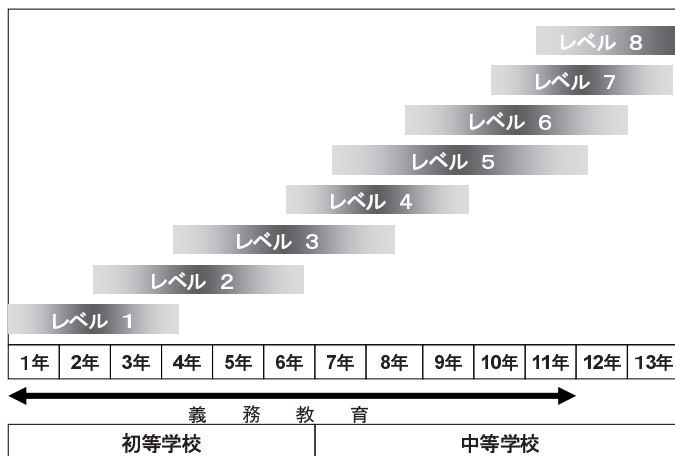
このように、ESOL 教育では政府からの資金を得るために、ESOL 学習者の評価は継続して行われ、個々の学習者の英語力の伸長の記録が残される。資金援助のための手引書には達成目標と評価規準・評価方法が明示され、評価を定期的に行うことにより、個々の ESOL 学習者の英語力の伸長の経緯が明らかになり、学習者のニーズに応じた指導体制が出来上がっている。

## 2.2 ニュージーランド・カリキュラム

1980 年代後半に始まった教育改革の流れの中、1994 年に全国の教育課程のガイドラインとして『ニュージーランド・カリキュラム』（日本の『学習指導要領』に相当）が策定された。これは、ニュージーランドで英語による教育を行う全ての学校を対象とした、公式な教育方針を示した文書である<sup>6</sup>。

2007年11月よりこのカリキュラムが施行され、2010年2月に義務化された。

図2 学年と『ニュージーランド・カリキュラム』のレベルの関係



(The New Zealand Curriculum に基づき作成)

このカリキュラムは、学習の方向(Direction of Learning)と指導・カリキュラム作成のガイド(guidance)から成る。学習の方向性では、どのような価値観や能力を持った児童・生徒を育成していけばよいのかと8つの学習領域<sup>7</sup>の学習目的やレベル毎の到達目標などが示されている。例えば、“In English, students study, use, and enjoy language and literature communicated orally, visually, or in writing.” (The Ministry of Education. 2008b, p. 17) のように目標が記述されている。

図2のように、各学習領域は8つのレベルに分けられ、1つのレベルが複数の学年にまたがっていることが特徴である。『ニュージーランド・カリキュラム』は教育の方向性を示したものであるため、それぞれの学校はこれを

大枠としながら、地域や児童・生徒のニーズ、自校の教育方針を踏まえた具体的なカリキュラムを立てることになる。

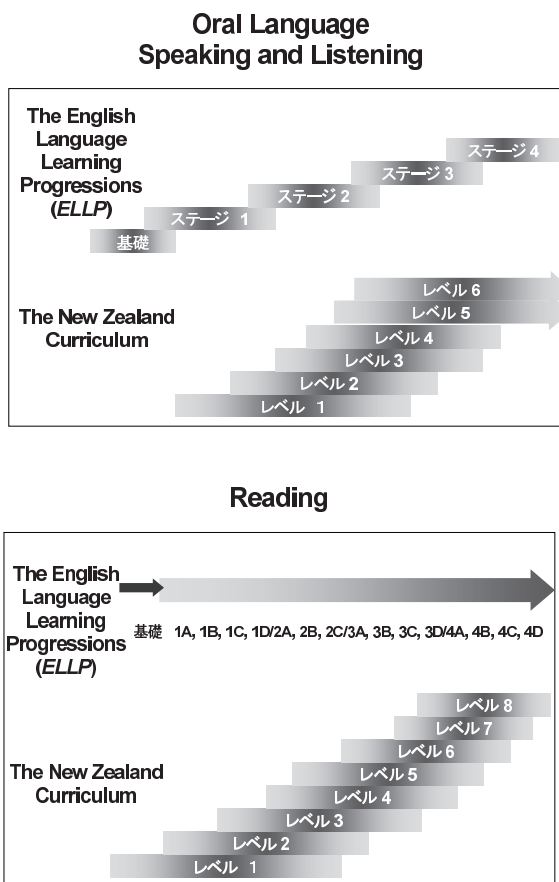
### 2.3 *The English Language Learning Progressions (ELLP)*

前項で述べた『ニュージーランド・カリキュラム』と平行して、ESOL教育での指導で活用されているのが *ELLP* である。これは、英語を母語としない学習者が、どのように英語を学習していくのかをオーラル（リスニング・スピーキング）、リーディング、ライティングの各領域について、評価例と共に提示したものである。第1～4学年、第5～8学年、第9～13学年の3分冊で、いずれの表紙にも *A resource for mainstream and ESOL teachers* と記されているように、ESOL教育担当の教師だけでなく、ニュージーランド人対象の通常授業(mainstream)の教師も対象とした教育資料である。これは、前述のように、近年ニュージーランドの教育現場での児童・生徒の民族、出身国・地域の多様化し、ESOL教育を必要とする児童・生徒にかかわる機会が増えているからである。ESOL教育の期間を終了して通常授業に戻ってきた児童・生徒の英語力の発達段階について、通常授業を担当している教師も知識を得ておく必要がある。

*ELLP* は、それぞれの学年における学習者の傾向や教師への示唆を記している。全学年の一貫する特徴的な考え方は、英語を第2言語(second language)としてではなく、付加言語 (additional language)として捉え、ESOLの学習者に母語の伸長を促していることである。母語を維持し、母語の CALP (Cognitive Academic Language Proficiency)<sup>8</sup>も伸ばした学習者の方が、次に学習する言語 (additional language) の習得においてもよい結果を出していることを踏まえ、特に考えたり議論したりするときは、母語を使うことを教師は奨励するべきであると説いている。

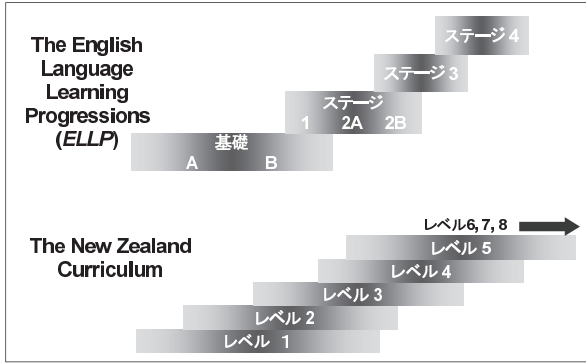
第1～4学年のELLPは「基礎」～「ステージ2」、第5～8学年のELLPは「基礎」～「ステージ3」、第9～13学年のELLPは「基礎」～「ステージ4」に分けて、それぞれの技能について段階ごとに学習者ができることについての具体的な特徴が記述され、リーディングとライティングについては、それぞれのレベルごとの教材例や評価例などが示されている。

図3 ELLPと『ニュージーランド・カリキュラム』のレベルの関係





## Writing



(The English Language Learning Progressions: Years 9-13 に基づき作成)

英語を母語としない学習者の英語力の発達段階の指標である ELLP は、『ニュージーランド・カリキュラム』の英語科での発達段階と照らし合せて、通常授業に参加するには各学年でどの程度の英語力が必要かを 4 技能について具体的に示している。図 3 は、各技能の ELLP における段階（ステージ）と『ニュージーランド・カリキュラム』の段階（レベル）との関係である。例えば、『ニュージーランド・カリキュラム』において第 4 学年の児童が達成すべきカリキュラムの段階はレベル 2 である（図 2 参照）。それを達成するためには、ESOL 教育においてオーラル（スピーキング・リスニング）は「ステージ 1」～「ステージ 3」、リーディングは「基礎」～「ステージ 1D / 2A」、ライティングは「基礎」～「ステージ 2B」の英語力が求められる。第 8 学年であれば、『ニュージーランド・カリキュラム』の目標段階は、レベル 4 であるため、図 3 を見ると、ステージ 3～4 のオーラルスキルが必要であることがわかる。このように、教師は ELLP を基に児童・生徒が英語学習過程のどの段階であるのかを把握し、それぞれの年齢や学習歴などにあわ

せた学習内容を決定したり、『ニューージーランド・カリキュラム』に沿って進められる普通授業に支障なく参加することができる英語力が備わっているかどうかを知ることができる。

第1～4学年の *ELLP* では、「基礎」～「ステージ2」までの特徴が示されている（資料1参照）。この段階での学習者の英語のレベルは、母語での教育レベルと英語学習歴の影響が大きい反面、同年代の母語話者の英語力に比較的近いいため、教材などは母語話者用に作成されたものを利用できるとされている。しかし、特にリスニングに関しては、バイリンガルの支援者やバイリンガル絵辞書を活用する必要があるとしている。

第5～8学年の *ELLP* では、「基礎」～「ステージ3」までの特徴が示されている（資料2参照）。この段階では、生徒が通常授業で他の生徒たちと同じような学びを可能とする英語のスキルを身につけるために、教師による組織だった支援が必要である。そのため教師は、どのような力が個々の生徒に必要であるかを正確に診断しなくてはならない。特にリーディングの「ステージ1」～「ステージ3」とライティングの「ステージ2」に関しては、さらに2、3つの下位レベルに細分化されて記述されており、学習者のレベルが多岐に渡ることを示している。また、母語の学習を継続することは、思考能力の発達と関連しているため、奨励する必要があることを説いている。

第9学年～13学年の *ELLP* では、「基礎」～「ステージ4」までの到達目標が示されている（資料3参照）。リスニングおよびスピーキングは「基礎」～「ステージ4」まで、リーディングは「基礎」～「ステージ4」のうち、「ステージ1」～「ステージ4」が、それぞれさらに3～4レベルに細分化され、ライティングにおいても「基礎」～「ステージ4」のうち、「基礎」と「ステージ2」がそれぞれ2レベルに分けて表示されている。このレベルでは、学習者の英語学習歴によっては *ELLP* で示される到達目標は高すぎる

可能性があるので、教師（特に ESOL の教師）が個々の生徒の学習ニーズを正確に診断し、必要とされる支援を行うことが重要であるとされている。

### 3. 日本の英語教育への示唆

日本の『学習指導要領』は最低限度の学習内容を示すガイドラインで、詳細な言語能力の指標は明記されていない。また、カリキュラムは、各検定教科書のシラバスで代用されている。このことの是非は別の議論として、本稿で見たニュージーランドの母語話者以外のための英語教育から日本の英語教育への示唆は、英語学習者の英語力の伸長を見極めるための評価規準と達成目標の明示化と学習者の個人差に配慮した、達成の時期に幅を持たせた目標（域）の設定である。

これまで述べてきたように、ニュージーランドでは、*ELLP* という資料で、英語を母語としない英語学習者の英語力の伸長段階を、第1～4学年、第5～8学年、第9～13学年に分けて詳細に示し、この段階は、母語話者にも適用される『ニュージーランド・カリキュラム』と対応している。このことによって、教師は ESOL 児童・生徒の英語のレベルが英語を母語とする学習者と同じ授業（mainstream）に入れるかどうかを判断することができると同時に、どの領域（技能）をさらに伸長する必要があるのかを知り、学習者に応じた手立てを講じたり、適切な教材を選択することができる。

ニュージーランドの学校教育において特徴的であるのは、ESOL 教育だけでなく通常の英語授業においても、学年の枠にとらわれず、個々の児童・生徒の習熟度に合わせた指導が行われていることである。これは、独自の『ニュージーランド・カリキュラム』において、教科ごとに8段階で設定されている達成目標が、1学年対応ではなく2～3学年にまたがり、「幅」を持っていることに起因する。移民の増加と多様化によって、英語の能力の個人差

が著しい児童・生徒の実態に即して、長期的な取り組みの中で習熟度に合わせた指導をしていくことで、すべての児童・生徒に対して個に応じた教育を提供する方法として参考になると思われる。

日本の学習指導要領外国語（英語）科でも平成10年の改訂では、学年枠を取り払い、3年間で自由に言語材料を指導するようになった。しかし、検定教科書を使って授業を行う公教育では、学習指導要領に沿った内容を指導し、指標を定めるために言語能力を測る手立てがないという現実的な問題がある。英語の授業が上級学校への入学試験志向になっていることも、各技能の熟達度が十分に解明されていない大きな要因である。英語が母語と同じようにコミュニケーションの手段であり、ことばは日常的な生活の中での課題解決のために創造的に使われるものであるという視点から授業を創ろうとする意識がほとんど感じられない（高島, 2011）。

一方、ニュージーランドのESOL教育では、様々な背景を持つEAL学習者の典型的な英語力の伸長について*ELLP*に記述することで、各段階における達成目標を明示し、EAL学習者が、通常授業に支障のない英語力を身につけるように指導することを教師に求めている。学習者の熟達度を明示的に記述することは、オーストラリアのESL Bandscale<sup>9</sup>の他、CEFRを参考に、フィンランドが自国の英語学習者に合わせたバージョンを開発している（村上 他, 2006）。また、中国では、学習者の達成レベルを『基礎教育課程標準』に技能ごとに提示し、小学校、中学校、高等学校卒業時に達成すべきレベルを設定している。教師は、発表の場を多く設けるなど、児童・生徒が設定されたレベルを達成できるように意識した授業を行っていた（村上 他, 2008）。

更に、*ELLP*には、評価者による評価のプレを防ぐために、各段階における学習者の成果物（例えば、ライティングでは、作文や日記など）を掲載し

て、それぞれの段階で学習者がどの程度のことができるのかを具体的に示している。このように、学習者のパフォーマンスを評価する姿勢は、イギリスの EAL 教育やオーストラリアの ESL 教育においても見られる。パフォーマンス評価は、特に、「話すこと」の評価には欠かせないものであり、例えば、場面設定をしたロールプレイなどの妥当性のある評価方法を取り入れることが必要である（村上 他, 2003）。

外国語の熟達尺度を開発するに当たって重要な視点は、あるレベルに達している学習者は、生活の中で実際に言語を使って何ができるのかを明示することである（Bachman, 1990）。この視点に立ち、North (2000) は、CEFR で使われる熟達度のカテゴリー（Breakthrough, Waystage, Threshold, Vantage, Effective Operational Proficiency, Mastery）と関連づけた、より現場の教師が利用しやすい形での言語発達の共通参照枠を開発している。開発に当たっては、約 1,000 の熟達度の記述（descriptor）をデータとして使用し、50 人以上の教師とのワークショップで熟達度記述とカテゴリーの対応を見定め、更に、100 名の英語の教師に各自の授業で使用してもらい、教師が実際にどのような評価を行ったかを分析し、最終的には、約 80% の熟達度記述を妥当性の高いものとしている。熟達尺度の開発には、継続的なデータの収集とそれに基づく研究が必須なのである。

日本の英語学習環境や学習者の動機はヨーロッパともニュージーランドとも、また、中国とも異なる。学習者の実態に応じた英語教育が必要であることは論を待たないが、まず日本の英語学習者がどのような段階を踏んで英語力を伸長するのかを明らかにしなければならない。例えば、高島 他 (2007) では、約 360 人の同一の中学生を 3 年間経年で文法構造の習得過程を追い、前置詞句による名詞の後置修飾などの日本語と語順が違うものは習得が困難であることを明らかにしている。学習は時間のかかるものであり、また、

学習効果も一朝一夕に見られるものでもない。学習者の実態を把握した上で、他国の基準を参照しながら、日本独自の達成目標と評価規準・評価方法を開発することが、将来の日本の英語教育の方向性を決定づけることになる。高い語学力は国益に資することを認識し、対策をとることが急務である。

## 注

- 1 本研究の一部には、平成 22 年度星城大学経営学部特別研究奨励費を充当した。
- 2 人口に関する数値は、筆者らがオークランド大学でニュージーランドの教育制度について講義を受けた、Literacy Learning (NZ) Ltd. の Ms. Leanna R. Traill の資料によるものであり、2001 年の国勢調査における数値である。
- 3 ヨーロッパで共通の外国語学習の到達度を記述するのに使用するガイドラインである。欧州協議会が 1989 年から 1996 年にかけて行った「ヨーロッパ市民のための言語学習」プロジェクトの中心となった。その目的はヨーロッパの全ての言語に使える評価方法と指導方法を提供することで、2001 年には欧州共同体協議会決議書(European Union Council Resolution) が言語能力の評価制度確立のために CEFR を使うことを推奨した。
- 4 ニュージーランドで生まれ育ったが、母語がマオリ語 (ニュージーランド原住民の言語) の児童・生徒もいるため、ESOL 授業は必ずしも外国からの児童・生徒対象ということではない。
- 5 リスニング 9 項目、スピーキング 11 項目、リーディング 12 項目、ライティング 13 項目の計 45 項目について、それぞれ、cohort に近い (3 点)、cohort より下 (2 点)、cohort よりかなり下 (1 点) で採点し、135 点満点中 112 点を ESOL 教育資金援助のベンチマークとしている。112 点を超えた児童・生徒は必要に応じて ESOL 教育を受けることはできるが、政府からの資金援助は打ち切られる。
- 6 『ニュージーランド・カリキュラム』とは別に、*Te Marautanga o Aotearoa* というマオリ語を使用言語とする学校を対象とした指導要領も作成されている。
- 7 英語、芸術、保健体育、外国語、数学・統計、科学、社会科学、テクノロジー。
- 8 CALP は、学校で提供されるような認知的に負荷が高い課題をこなすために必要な言語能力を指す。これに対して、日常的な他者とのコミュニケーションなどに必要な能力である BICS (Basic Interpersonal Communication Skills) がある (Richards & Schmidt, 2010)。

9 クイーンズランド州において、数年にわたる ESL 学習者の英語熟達度に関する調査をもとに開発された、熟達度の尺度。詳細は、村上他（2003）参照。

## 引用文献

- 高島英幸, 他. 2001. 「日本の英語教育の方向性を考える — イギリスにおける移民への英語教育からの示唆—」『STEP 英語情報』 7・8月号. pp.32-39. 日本英語検定協会.
- 高島英幸, 他. 2007. 『中学生の英語学力調査：英語の文構造把握力の観点から』平成15～18年度科学研究助成金による研究報告書.
- 高島英幸（編著）. 2011. 『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』大修館書店.
- 村上美保子, 他. 2003. 「オーストラリア（クイーンズランド州）に見るパフォーマンス重視の教育実践と評価（前）（後）」『STEP 英語情報』7・8月号 pp.28-33, 9・10月号 pp.30-35. 日本英語検定協会.
- 村上美保子, 他. 2006. 「フィンランドから日本の英語教育への示唆—教育水準世界一の国における英語教育（前編）（中編）（後編）」『教職研修』3月号 pp.119-127, 4月号 pp.56-65, 5月号 pp.72-81. 教育開発研究所.
- 村上美保子, 他. 2008. 「諸外国の英語教育事情を通して日本の英語教育を考える—中国（瀋陽市・北京市）とスイス（バーゼル州）の視察を中心に—」『英語指導者養成講座 Book 2』Part 3. pp.43-76. 日本英語教育協会.
- Bachman, L. F. 1990. *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford University Press.
- Education Review Office. 2006. *Assessment in Primary Schools: A Guide for Parents*. (<http://www.ero.gov.nz> より取得)
- Kitchen, M. 2009. “Is Asia represented in New Zealand secondary school curricula?” *Curriculum Matters*, Wellington: NZCER Press.

- National Curriculum 2000. *A Language in Common: Assessing English as an Additional Language*. QCA Publications.
- North, B. 2000. *The Development of a Common Framework Scale of Language Proficiency*. Peter Lang Publishing, Inc.
- Richards, J. C. & Schmidt, R. 2010. *Longman dictionary of language teaching and applied linguistics* (4th ed.). London, UK: Pearson Education Limited.
- The Ministry of Education. 2004. *ESOL Funding Assessment Guidelines*. Wellington: Learning Media Limited.
- The Ministry of Education. 2008a. *English Language Learning Progressions: Facilitation manual for school self-access professional development*. Wellington: Learning Media Limited.
- \_\_\_\_\_. 2008b. *The New Zealand Curriculum*.
- \_\_\_\_\_. 2008c. *State of Education in New Zealand*.
- \_\_\_\_\_. 2008d. *The English Language Learning Progressions: Years 1-4*. Wellington: Learning Media Limited.
- \_\_\_\_\_. 2008e. *The English Language Learning Progressions: Years 5-8*. Wellington: Learning Media Limited.
- \_\_\_\_\_. 2008f. *The English Language Learning Progressions: Years 9-13*. Wellington: Learning Media Limited.



## 資料 1

### ELLP 第 1～4 学年における各レベルの特徴

#### オーラル（スピーキング）

	レベル		
	基礎	ステージ 1	ステージ 2
場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直接顔を会わせた状況で反応する。</li> <li>・第 1 言語を交えて応答する。</li> <li>・制限されたインタラクションにのみ参加する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・制限されたインタラクションにのみ参加する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聞き手や目的にあわせて適切に応答する。</li> <li>・様々な場面のインタラクションに参加する。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数語で話し、形式的な返答をする。</li> <li>・だまったり、不正確な返答をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読んだり聞いた内容の要点を言う。</li> <li>・コメントをするなどして、会話を自分から始める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・質問する、指示を出す、買い物をする、問題を説明する。</li> </ul>
話し方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・返答しなかったり、返答に時間がかかる。</li> <li>・第 1 言語に影響された発音をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話すときに間がある。</li> <li>・最小対 (pin/bin) を区別する。</li> <li>・第 1 言語に多少影響される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・より多くの語彙を使用する。</li> <li>・流暢に話す。</li> <li>・聞き手に分かりやすい発音である。</li> </ul>
非言語による反応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関連のあるジェスチャーや表情をする。</li> <li>・理解の不足や自信のなさを、黙ることで表す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指示に従ったり、タスクを完了させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語らしい非言語の特徴を見せ始める。</li> </ul>
言語構造	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1 語で言ったり、聞いた表現をそのまま繰り返す。</li> <li>・第 1 言語で返答する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頻出語を使い、機能語を落として発話する。</li> <li>・考える時間がある場合は、主語・動詞・目的語の語順の文を使う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・機能語を使用し、かなり結束性のある正確な文を発話する。</li> <li>・決まり文句だけでなく、自分で作り上げた文を使う。</li> </ul>

## オーラル（リスニング）

	レベル		
	基礎	ステージ1	ステージ2
場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>直接顔を会わせた状況で、写真などがあると理解できる。</li> <li>制限されたやり取りでのみ理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>制限されたやり取りでのみ理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>様々な場面のやり取りを理解する。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>簡単な英語で表現された概念を理解する。</li> <li>基本的な指示や質問を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>歌や詩などの簡単で繰り返しの表現を理解する。</li> <li>馴染みのある内容であれば、1つか2つの中心となる概念を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>よく使われる口語表現やマオリ語を理解する。</li> <li>支援があれば馴染みのない内容のスピーチを理解する。</li> </ul>
話され方	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゆっくりと明確に発音された、簡単な言葉であれば理解する。</li> <li>簡単な指示や質問に伴うジェスチャーや表情を理解する。</li> <li>直接的な表現で、繰り返されれば理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ジェスチャーや表情声の大きさの変化などの意味を理解する。</li> <li>簡単な言葉で繰り返しがあれば、長い表現も理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自然な速さで話される、様々なアクセントのニューージーランド英語を理解する。</li> <li>流暢に話す。</li> <li>非言語的な特徴の意味を理解する。</li> </ul>
言語構造	<ul style="list-style-type: none"> <li>1語や短い表現を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>単純な文や長い決まり文句を理解する。</li> <li>会話などの自然な内容を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>複雑な文も多少理解する。</li> <li>完全な文と不完全な文を理解する。</li> </ul>
第1言語による支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>2ヶ国語使用者の補助や絵のついた2ヶ国語辞書、学習者の第1言語で書かれたテキストなどを通して、第1言語による支援が広範囲にわたり必要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2ヶ国語使用者の補助や絵のついた2ヶ国語書、学習者の第1言語で書かれたテキストなどを通して、第1言語による支援が広範囲にわたり必要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>可能であればいつでも、2ヶ国語使用者、2ヶ国語辞書、学習者の第1言語で書かれたテキストなどによる、第1言語による支援が継続的に必要である。</li> </ul>

## リーディング（各レベルで読むことができる文の特徴）

	レベル		
	基礎	ステージ1	ステージ2
トピック	<ul style="list-style-type: none"> <li>・とても短い文章で、繰り返しが多い。</li> <li>・1, 2個の単純なアイデアのみ含む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文章は短く、分かりやすい順序でアイデアが提示される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容が深いトピックで、背景知識を必要とする。</li> <li>・様々なタイプの文章が使われる。(説明文, 報告文など)</li> </ul>
言語構造	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1語, あるいは数語の文で, 主語・動詞・目的語の語順の文である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単文と重文が含まれる。</li> <li>・1文に2節以上は含まれない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文章は, 単文, 重文, に加え複文も含む。</li> <li>・前置詞句を含んだ長めの文の場合もある。</li> </ul>
語彙	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頻出語が繰り返し使われる。</li> <li>・頻度の低い語は, 内容から推測できるものが使われる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頻出語と頻度の低い語が共に使われる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頻出語と頻度の低い語と共に, 専門的な語が使われる。</li> </ul>
レイアウト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1ページに数語だけで, 絵による支援が十分にある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1ページに約3文程度あり, 絵による支援が十分にある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1ページに数文または短い段落があり, 絵も含まれることがある。</li> </ul>

## ライティング（各レベルで書くことができる文の特徴）

	レベル		
	基礎	ステージ1	ステージ2
トピック	<ul style="list-style-type: none"> <li>・範例通りの文章で、独自の部分は少ない。</li> <li>・考えがバラバラに現れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6～8文で、ある程度のまとまりがある。</li> <li>・中心となる考えは、詳しく述べられている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・段階を追って文章が組み立てられ、パラグラフの構造が正しく使われている。</li> <li>・考えが繋がっていてまとまりがある。</li> </ul>
文構成と 言語構造	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習した構造が繰り返し使われる。</li> <li>・多くの文法的な誤りが見られる。(冠詞、動詞の形、時制など)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形式的な構造に頼ることは少なくなる。</li> <li>・内容を膨らますため、接続詞 because などを使用する。</li> <li>・考えを順を追って述べるためのつなぎ言葉が見られる。</li> <li>・第1言語の知識を使って、複雑な文を書くようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関係代名詞など、様々な構造の文が含まれる。</li> <li>・従属節や助動詞を使用する。</li> <li>・学習した構造を過剰使用する傾向が見られる。</li> </ul>
語彙	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頻出語が繰り返し使われる。</li> <li>・内容に特化した語はほとんど使われない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・語彙の使用が広い。</li> <li>・学習した、内容に特化した語が使われる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適切な語を様々な使い、自分の意見を述べる。</li> <li>・正確さに欠け、不十分な語の使用が見られる。</li> </ul>
字体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習は進行中で、大文字・小文字が混ざる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読むことが出来る書き方をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読みやすい書き方をする。</li> </ul>
編集・ 綴り・ 句読点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で直した跡が見られる。</li> <li>・発音通りに書いた語が見られる。</li> <li>・単純な句読点にも誤りがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師によって指摘された修正の跡が見られる。</li> <li>・頻出語は正しく綴られている。</li> <li>・句読点に対する気付きが見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正確にするための修正の跡が見られる。</li> <li>・同音異義語などを書く際に注意していることがわかる。</li> <li>・正確な短縮形を用いる。</li> </ul>

## 資料2

### ELLP 第5～8学年におけるレベル（ステージ3）の特徴

#### オーラル（スピーキング）ステージ3

場面	<ul style="list-style-type: none"><li>・コミュニケーションを図るために、聞き手や目的に応じて、適切な方法で応答する。</li><li>・適切な語彙を選択する（例：正式な場面で使われる語か、口語的な語か区別することができる）。</li><li>・様々な文脈の中で話す。</li></ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"><li>・言おうとする内容を考える時間のある時や自発的に話している時に、言い返したり、会話を始めたり、長い間話したりする。</li><li>・言語の特殊表現（例：しゃれや皮肉）を効果的に適切に使用する。</li></ul>
話し方	<ul style="list-style-type: none"><li>・聞き手がふだんより簡単に理解できるように単語を発音する（話者の年齢や他の要因によっては母語の特性を持ち続ける）。</li></ul>
非言語による反応	<ul style="list-style-type: none"><li>・コミュニケーションで使用する英語の非言語表現を意識して選択する。</li></ul>
言語構造	<ul style="list-style-type: none"><li>・不正確さもなく、さまざまに複雑な言語構造を標準英語で使用するようになる。</li><li>・自然な話しことばを使用する（例：I am coming. と言う代わりに Coming と言うなど）。</li></ul>

#### オーラル（リスニング）ステージ3

場面	<ul style="list-style-type: none"><li>・広範囲の自然な発話のメッセージが理解できる。</li><li>・インタラクティブな場面（例：グループまたはパネルディスカッション）における多様な発話者の意見が理解できる。</li></ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"><li>・広範囲のカリキュラムや社会的な内容が理解できる。</li><li>・馴染みのないカリキュラムと社会的な場面での自然な発話の広範囲なメッセージを理解できる。</li><li>・明確に定義され、説明されているかぎり、比喩的なことば（しゃれ、隠喩）を理解できる。</li></ul>
話され方	<ul style="list-style-type: none"><li>・英語が追加言語である発話者を含め、ある程度のアクセントが理解できる。</li><li>・非言語的な言語の特性の目的や効果が理解できる。</li><li>・標準的で口語的なことばが理解できる。</li><li>・自然な速度で話されることばが理解できる。</li></ul>

言語構造	<ul style="list-style-type: none"> <li>いくつかの考えでつながっているテキストまたはテキストの流れが理解できる。</li> <li>自然な速度で話されたり決められたポーズがない形で話される発話の長めのメッセージが理解できる。</li> </ul>
第1言語による支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>2ヶ国語使用者、2ヶ国語辞書、学習者の第1言語で書かれたテキストなどによる、第1言語による支援が継続的に必要である。</li> </ul>

## リーディング（各レベルで読むことができる文の特徴）

基礎	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 ページに 2, 3 語。</li> <li>イラストによる十分な補助があり、繰り返し表現が多い。</li> <li>頻出語を使い、主題語は少なく、慣用表現はほとんどない。</li> <li>単語や簡単な単文で構成されている。</li> <li>約 39 語, 12 種類の単語で文章構成する。</li> </ul>
Stage 1-A	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 ページに 1 文のみ。</li> <li>イラストによる十分な補助や繰り返し表現がある。</li> <li>頻出語を使い、内容からよく読み取れる主題にかかわる語をいくつか用いている。慣用表現はほとんどない。</li> <li>1つの節からなる、簡単な文章で構成されている。</li> <li>約 33 語, 19 種類の単語で文章構成する。</li> </ul>
Stage 1-B	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 ページに 2, 3 文の短い文章。</li> <li>多様性に富む文章の始まり。</li> <li>主題が単純な流れで読み取れる。</li> <li>イラストによる十分な補助がある。</li> <li>頻出語を使い、内容からよく読み取れる主題にかかわる語をいくつか用いている。</li> <li>単文または重文を用いている。</li> <li>約 144 語, 49 種類の単語で文章構成する。</li> </ul>
Stage 1-C	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 ページに約 3 文。</li> <li>多様性に富む文章の始まり。</li> <li>主題が単純な流れで読み取れる。</li> <li>イラストによる十分な補助がある。</li> <li>繰り返し表現がほとんどない。</li> <li>頻出語を使い、頻度の低い語や特別な表現もいくつか用いている。</li> <li>単文と重文を用いている。</li> <li>約 103 語, 59 種類の単語で文章構成する。</li> </ul>
Stage 1-D (Stage2 -A)	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 ページに約 3 文以上。</li> <li>繰り返し表現はほとんどない。</li> <li>イラストによる補助がある。</li> <li>頻出語を使い、頻度の低い語や、専門語、主題にかかわる語もいくつか用いている。</li> <li>単文、重文の他にいくつか複文も用いている。</li> <li>前置詞句や他の文法構造を含んでいる。</li> <li>約 45 語, 40 種類の単語で文章構成する。</li> </ul>

Stage 2-B	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 1 ページにいくつかの文章がある。</li> <li>• 繰り返し表現はほとんどない。</li> <li>• イラストによる補助が多少ある。</li> <li>• さまざまな頻出語を用い、専門語や主題にかかわる語もいくつか用いている。</li> <li>• 主題が掘り下げられたり、学習者の背景知識から推測させられるものが含まれている。</li> <li>• 単文、重文、複文を使用。</li> <li>• 前置詞句や他の文法構造を含んでいる。</li> <li>• 約 209 語、100 種類の単語で文章構成する。</li> </ul>
Stage 2-C (Stage 3 -A)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• パラグラフ構成されている。</li> <li>• 図やイラストまたは写真などの補助がある。</li> <li>• 主題が掘り下げられ、考えをつなげるための接続詞が用いられている。</li> <li>• さまざまな頻出語を用い、本文からは推測できないような専門語や主題にかかわる語もいくつか用いている。</li> <li>• 単文、重文、複文、時には受け身や、直接話法が含まれる文型を使用。</li> <li>• 約 111 語、70 種類の単語で文章構成する。</li> </ul>
Stage 3-B	<ul style="list-style-type: none"> <li>• パラグラフ構成されている。</li> <li>• 図やイラストまたは写真などの補助がある。</li> <li>• 主題が掘り下げられ、考えをつなげるための接続詞が用いられている。</li> <li>• 本文からは推測できないような専門語や主題にかかわる語がいくつか用いられている。</li> <li>• 慣用表現もいくつか用いられている。</li> <li>• 文章が長い。</li> <li>• 単文、重文、複文、時には受け身や、直接話法が含まれる文型を使用。</li> <li>• 約 195 語、123 種類の単語で文章構成する。</li> </ul>
Stage 3-C	<ul style="list-style-type: none"> <li>• パラグラフ構成されている。</li> <li>• 図やイラストまたは写真などの補助がある。</li> <li>• 主題が掘り下げられ、考えをつなげるための接続詞が使われ、本文の形式も多様化している。</li> <li>• 本文を理解するために推測する力が求められる。</li> <li>• 本文からは推測できないような頻度の低い語や専門語、主題にかかわる語がいくつか用いられている。</li> <li>• 慣用表現もいくつか用いられている。</li> <li>• 文章が長い。</li> <li>• 単文、重文、複文、時には受け身や、直接話法が含まれる文型を使用。</li> <li>• 約 216 語、127 種類の単語で文章構成する。</li> </ul>

## ライティング（各レベルで書くことができる文の特徴）

基礎	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本的な文章の書き方。文章を書く方向やアルファベットの大小文字の違い、単語の書き方や簡単な句読点など。</li> <li>まず初めは教師が書いたものの模倣から始まる。</li> <li>限られた語彙、短い文章で、自分の考えを無作為に表現できる。</li> </ul>
Stage 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語の十分な語彙と文型の知識があり、短いオリジナルの文章が少なくとも6～8文書ける。</li> </ul>
Stage 2-A	<ul style="list-style-type: none"> <li>文の構造は簡単であるが、考えをパラグラフにまとめることができる。</li> </ul>
Stage 2-B	<ul style="list-style-type: none"> <li>長い文章が書け、文の始まりが多様性に富み、前置詞句、動詞句、副詞句などが用いられ、様々な接続詞を使い、文に結束性がある。</li> </ul>
Stage 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章構成がよくなされ、パラグラフ、文単位でも適切な文の形式が用いられており、目的にかなった文章を書くことができる。</li> <li>長期間英語を学習している学習者でない限り、第5～8学年の生徒で、ステージ3へ到達する生徒は稀であり、段階に到達できたら、母語話者の学習者とさほど変わらないレベルである。</li> </ul>



### 資料3

## ELLP 第9～13学年におけるレベル（ステージ4）の特徴

### オーラル（スピーキング）ステージ4

場面	・様々な聞き手・目的・状況などに応じて適切な言葉を選べる。 (例えば、フォーマルな状況とインフォーマルな状況とで、違いをつける。)
内容	・会話をやり取りしながら継続させたり、会話を進めたり、そして長く話せる。 ・皮肉、風刺、婉曲表現など、効果的に洗練された言語表現を適切に用いることができる。
方法	・単語を明確に発音し、正確かつ流暢に話せる。
非言語語による反応	・効果的に、ポーズ、声の音調や大きさの変化、ジェスチャー等を用いることができる。
言語構造	・ほとんど間違いもなく、多様な文や複文を用いることができる。

### オーラル（リスニング）ステージ4

場面	・多様な話者の言うことを理解できる。(例えば、グループやパネルディスカッション。) ・視聴覚教材を他者からの支援なしに理解できる。(例えば、教師の助けなしにビデオの内容を理解できる。)
内容	・視聴覚教材を含めた幅広い内容のテキストを理解できる。 ・馴染みがあるなしにかかわらず幅広い範囲で、長くて複文を含むスピーチを理解できる。 ・即興的な発話であるなしにかかわらず、いかなる状況においても発話を理解できる(例えば、ワークショップやスポーツゲーム、歴史ドキュメンタリー。) ・明確な説明がある場合、皮肉、風刺、婉曲表現など、効果的に洗練された言語表現を理解できる。
方法	・非言語語の特徴の目的や効果を理解できる。
言語構造	・母語話者と同様のレベルで、様々な構文や複文が使用されている広範囲な発話を理解できる。
第1言語による支援	・言語学習を強化するために、第一言語を使って言うことを必要とする。

## リーディング ステージ4

トピック	<ul style="list-style-type: none"> <li>トピックは大変深く展開され、専門的である。</li> <li>テキストの内容は、様々な異なる時間設定であったり、複数の人の意見を含んでいる。</li> <li>テキストは、1つのタイプではなく、それ以上のものが組み合わさっている。</li> </ul>
言語構造	<ul style="list-style-type: none"> <li>テキストには様々な文構造が含まれていて、それらには、関係節や受け身の文が含まれている。</li> </ul>
語彙	<ul style="list-style-type: none"> <li>テキストには表出頻度の低い語や専門的な語も含んでいる。</li> <li>テキストには、直喩、隠喩、慣用表現が説明なしに用いられている。</li> </ul>
レイアウト	<ul style="list-style-type: none"> <li>テキストは、段落ごとに構成されており、小見出し（副題）が用いられている場合もある。</li> <li>テキストには、イラストは用いられておらず、高いレベルでの解釈が求められるものもある。</li> </ul>

## ライティング ステージ3

（ステージ4は Advanced writing となるため記載されていない）

トピック	<ul style="list-style-type: none"> <li>トピックは、目的に応じて展開されている。</li> <li>トピックは論理的に構成され、考えが「しかしながら」「従って」などの適切な接続詞を使用することでつながっている。</li> <li>テキストは手本に準じている。</li> </ul>
文構成と言語構造	<ul style="list-style-type: none"> <li>テキストは多様で複雑な文構造を含んでおり、文構造は目的に応じて使用されているが、頻繁に誤りが見られる。</li> <li>冠詞の使用や主語と動詞の一致を誤るなど、構造の誤った使用が散見される。</li> </ul>
語彙	<ul style="list-style-type: none"> <li>一般的、専門的、また学術的な語彙を様々な教科やトピックにおいて選択して使用する。あまり馴染みの無い分野においては、語彙の選択はあいまいになる。</li> <li>ライティングの目的に応じて、語彙はほぼ適切に選択されるが、ジョークや説得する文章などを書く場合には努力を要する。</li> <li>母語を直訳して、語彙の選択が不適切になることがある。</li> </ul>
字体	<ul style="list-style-type: none"> <li>文体が確立され、文字の書き方を変えることはほとんど無い。</li> </ul>
校正・綴り・句読点	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分で校正することができる。</li> <li>馴染みのないトピックや、時間の制約、テストなどのプレッシャーがある場合は、コントロールが十分にできないことがある。</li> </ul>